

浄土

monthly
JODO

September 2003

9



昭和十五年に創刊された月刊誌『浄土』は昭和十八年の十二月号と十九年の正月号が合併発行されるまで、一回の休刊もなく発行され続けてきました。ですが十九年にはいと、太平洋戦争も佳境を迎えたせいか、欠番が出てきました。そうした中昭和二十年は正月号から三月号まで発行されるも、四月号からの発行ができず、昭和二十一年の二月号まで休刊となりました。

今回はそうした浄土発行の歴史の中で最も長い休刊の前の三冊、昭和二十年の正月号、二月号それに三月号の目次を特集します。なお二月号は佛教大學浄土宗文献室のご厚意で寄贈していただきました。

昭和二十年正月号



表紙・巻頭カット

宣伝の戦果を

大行者頭山翁

神々の國

小磯首相と観世音

寺庭の華

必勝の信念

謙虚と猛進

剣の境地

歌壇

俳壇

純孝純忠純誠の人々

編輯後記

跡部白鳥

徳富猪一郎

吉田紘二郎

戸松一峰

安井大學

佐藤春夫

岩野喜久代選

太田耳動子選

中村辨康

巻頭

10

1

12

5

8

13

8

17

17

14

18

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

浅草

誓教寺

誓教寺第二十一世本多英之住職と長男宏章副住職。右は誓教寺本堂、下は山門





臨教寺内陣と本尊。
本尊の阿弥陀如来は光背が浄土真宗型のものだ



境内に立つ北斎の銅像



臨教寺墓地のほぼ中央にある北斎の墓。昭和六十二年に墓石の風化を防ぐため、北斎愛好の人たちが覆堂を建てた



葛飾北斎の傑作「骸骨の図」。臨教寺の大切な一枚だ



北斎最後の浮世絵となった「地方測量の図」



江戸時代全盛だった浅草の交通はこの隅田川だった



鹽教寺本多住職。永八輔さんのお寺の落語会で法話を十七年続けている



古いものではないが、今に残る浮世絵の版木



浄土

2003/9月号 目次

カラグラビア 浅草 誓教寺.....	タカオカ邦彦	1
人間に宗教はなぜ必要か②	ひろさちや	6
表紙のことは.....	永井健策	15
寺院紀行 浅草誓教寺	真山 剛	16
会いたい人 富士真奈美②	関 容子	24
代替医療という世界⑤	井上朝雄	32
梵字③.....	真野龍海	34
響流十方	小村正孝	36
連載・民話をたずねて (最終回).....	石崎敬子<絵 石川忠夫>	40
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ『さっちゃんはネッ』	かまちよしろう	51
編集後記.....		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

（株）ティー・マップ主催「みとら」セミナーより

人間に 宗教はなぜ 必要か

第二回

宗教評論家

ひろさちや

われわれは、こつち岸の物差しを捨てると、その途端に仏さまの物差しで見ることができようになるわけです。そうすると、生き方が楽になれるんです。こつち側の物差しで見ても、いい子どもはいっぱいいるんです。そして、問題を何も起こさず、すくすく育っていく子どもはいるんです。百人中九十五人ぐらいの子どもはそうだと思います。しかし、五%ぐらいの子どもは、その物差しでは落ちこぼれにされ、そのために悩んでいるんです。しかも、これは近代国家になると、このパーセンテージはもっと大きくなってくると思えます。大勢の人間がその物差しで悩んでいるのです。そういう人々に、こつち岸の知恵でものを言ってもだめなんです。

男性も女性もおいでになりますが、どちらの悩みも多かれ少なかれ同じです。女性の場合、「いい奥さんにならないといけない」と思っておられるんです。「私はいいお母さんにならないといけない。いい奥さんにならないといけない」というその物差しが辛いわけです。世間が言っているいい奥さん、いいお母さんというのはどうものかという、それに縛られているんです。

ともかく、こつち岸の物差しで物を見ていると辛いんです。それを、ちょっと向こう岸から見ると、「こんな物差しはあやふやだ」と気がつく。気がつくようにしてくれるのが宗教なんです。

「人間に宗教は必要か」という問題ですが、人間は宗教を持っているから生きられるんですよ。「こつち岸でいい子どもにならなくていいんだ。こつち岸の物差しはおかしいよ」と気がつかせてくれるのは、宗教しかないんです。宗教を持っていない人間は、こつち岸の物差しでがんじがらめになって悩んでいます。こつち岸にいて、いい子になろうとして

悩んでいるわけです。ですから「宗教とは何か」というと、「向こう岸の智慧を教えてくださいるもの」といえると思います。

さて、それだけの前提をおいて、次に、問題を少し深めていきたいと思います。まず、「人間の価値、値打ちというのとは一体何なんだろう」、あるいは、「人生にどういう価値があるか」という問題です。この人間の価値、人生の価値というものを私たちはどうとらえているでしょうか。ときには私たちは絶望に陥ります。「私の人生なんて大したことはない。こんなつまらない人生で、生きがいなんてあるのだろうか。何のために生まれてきたんだろう。何もしないで死んでいくのはつまらない」と考えたときに、自殺したくなるようなケースもあるわけですね。

あるいは、「人間の価値というのとは何なんだ。人間にはどんな価値があるんだろう。私というこんなちっぽけな人間に一体価値があるのかないのか」という迷いが生じてくることもあるだろうと思います。こういう問題について私たちは悩みに悩んでいるわけです。

この人間の価値、人生の価値というものを誰も的確に、教えてくれないのです。だから、「一体何のために生きているんだ。僕の人生なんて何の意味があるんだ」というわけです。小学生の中でも、いじめられる子どもがいますが、いじめというのはどんな社会にもつながつています。ただ、今子どもたちがはじめなのは、人間の価値とか人生の価値というものをおだれも教えてくれないから、非常にみじめなんです。

学校に行っても、みんなにいじめ抜かれる、そんなときに、「俺は生きている価値はあるのか。なぜこんなにいじめられないといけないんだ」ということになります。その問

題を学校の先生に訴えても、「別にいじめているんじゃないよ。勝手に君がそう感じているだけじゃないか」となるわけです。「みんなが口をきいてくれない」と言っても、「人気がないから口をきいてくれないんだ」と言われてしまふんです。それじゃ、家に帰って、お母さんに言えるかというと、お母さんにも言えないわけです。なぜかというと、日本では家庭というものを全部壊してしまったからです。

皆さん三帰依文をご存じだろうと思います。「ブツダン、サラナム、ガツチャーミー、ダンマン、サラナム、ガツチャーミー、サンガン、サラナム、ガツチャーミー」というものです。これは佛、法、僧の三宝に帰依するという言葉です。この「サラナム（基本形はサラナ）」というのは何だろうと、パーリ語の辞書を引いたときに、「シエルター」という訳語がありました。避難所という意味なんです。防空壕という意味があつたんです。つまり、「ブツダン、サラナム、ガツチャーミー」というのはどういう意味かというと、「嵐の中で、あるいは、外でいじめられて、困り果てたときに、佛陀という避難所、防空壕に逃げ込みます」という意味なんです。世の中の問題でいろいろ悩み、苦しんだときに、「私は佛陀という避難所に逃げ込みます。そして、佛陀の教えという避難所に逃げ込みます。そして、サンガという避難所に逃げ込みます」という決意表明なんです。それが三帰依文なんです。

だから、私たちが外でいじめられた子どもが逃げ込む場所、あるいは、世の中でくそみそに言われて、やつつけられたときに逃げ込む場所として、佛、法、僧があるというわけです。

しかし、今の日本人はどうですか。会社でいじめられて、いやな思いをしたとき、どこ

に逃げ込むかという、赤提灯ですね。そうすると、「アカチヨウチン、サラナム、ガツチャミー」なんですね。今の日本はまさにそういうことになっているわけです。ところが、赤提灯に逃げ込んだとしても、本当の避難所にならないですよ。また翌日もいやな思いをして、また行くわけです。そして、習慣性になってしまいうんですが、そういうものじゃだめなんですよ。だから私たちは佛教の教え、佛さまの教えに避難所を求めるべきなんです。

それと同時にこのサンガというのは、「僧伽」と書いて、その省略形が僧になるわけです。この「僧伽」サンガというのはお坊さんではなく、「集まり」という意味なんですね。場合によっては、「ガナ」という言葉も使われています。ガナというのも、商工組合とか組合というような、集まりなんです。だから、サンガというのは大勢の集まり、佛教者の集まりのことをいうのです。

また別の言い方をすれば、インドの佛跡と一緒に旅しているようなときには、そのグループがサンガなんだというわけです。みんなで力を合わせていこうという意味のサンガなんです。もつと大事なのは、家庭がサンガなんです。ですから、外でいじめられたときに家庭に逃げ込んでいくというのは大事なことだと思えます。

ところが、子どもたちが学校でいじめられて、逃げ込める場所がどこにあるかということなんです。精神空間みたいなものがなくて、やはり佛教が必要なんです。これは家庭なんですよ。そしてその家庭の中では、ダンマ、法がなければならぬわけです。

そういう家庭をつくらなければならぬわけですが、今や、家庭がそういう機能をしていないわけですね。日本人は家を壊してしまつて、家庭はねぐらにしかなくなっていないんで

す。ですから、法もない、佛陀もないという、単なるねぐらにしかなくていないというのが現状です。したがって子どもも逃げ込む場所がないわけです。だから、友だちには悩みをしゃべれるけれども、家ではしゃべれないということになっているんです。

何故そういうふうになっているかというと、結局今の日本の家庭は、親からしておかしんです。例えば「嘘をつくな」と教えます。仏教でも「不妄語戒」というのがあります。これは「嘘をついてはいけない」ということです。道徳教育においても、「嘘をついてはいけない」と言います。この違いは何でしょうか。

嘘とは何かと言ったとき、私はあるとき、アメリカ人と話をしていて、私が「嘘をつくことは悪いことだ」と、何気なく言ったんです。そうすると、「えっ」と聞きただしてききました。「お前、今、変なこと言ったけど、何なんだ」というので、「嘘をつくのは悪いことだろう」と言ったんです。「それじゃ、聞くけれども、強盗が入ってきて、金の隠し場所を教えろと言われても、うちには一銭もお金がありませんと言ったところ、横で聞いていた子どもが、お父ちゃんの嘘つき、あそこに隠してあるじゃない、と言ったとする。そういう子どもになるように教えるのか」というわけです。

「泥棒には教える必要はない」と言ったら、「それみろ」と言うんですね。「敵に対して嘘をついても構わないじゃないか。仲間をだます嘘は悪い嘘で、敵はだましてもいいんだろう」と言われたわけです。そこで、そういう考えもあるのかなと思っただけです。

別のアメリカ人と話していたときですが、我々日本人は気軽に言いますでしょう。「それ、嘘だろう?」とかですね。昔は「本当?」などと言ったものですが、最近では「うそ!」などと言いますよね。

そういう「うそ」という言葉を何気なく言ったんです。そうすると、ものすごく怒られたんですよ。「どうして俺がお前に嘘を言う必要があるんだ。俺とお前は仲間じゃないか。どうして俺がお前に嘘をつくんだ」と言つて、とても怒られたことがあるのです。

なるほど、仲間同士では嘘をつかないということですね。そうすると嘘をつく関係というのは、人間関係では敵なんだとみているわけです。敵に嘘をついてもいいけれども、仲間には嘘をつくな、ということ、分けているんですね。つまり、「お前、嘘ついただらう」と言つたら、「お前は敵だ」と宣言しているに等しいわけですね。

こういう場合にどのように言つたらいいのかと、英会話のうまい人に聞いたら、「それはジョークだろう、と言うべきだ」ということでした。そうすると、相手は傷つかないわけですね。

大事なことは、要するに、敵に対しては嘘をついても構わないですが、仲間には嘘をついては絶対にいけないという、その辺が倫理の基準になってくるわけです。

そうすると、お釈迦さんが言われた「不妄語戒」というのはどういう意味かといえば、「嘘をついてはいけない」というよりも、「あなた方、真実を語る勇氣をもちなさい」ということなんです。嘘をつくな」と訳したら、道徳になつてしまふんです。

道徳というのは怖いんです。考えてみれば、道徳というものは「偉いさん」には適用されないんです。弱い人々だけが道徳に縛られるんです。学校の先生は、子どもに「遅刻してはいけません」と言うけれども、その先生が遅刻してないかという、遅刻していますよ。先生が嘘をついても構わないわけです。政治家は嘘をつきまくっているくせに、国民には「嘘をついてはいけない。道徳教育をやらなければならない」と言っているんです。

道徳教育というのをよくよく考えると、私は、「ゲゼルシャフト（利益社会）において、強い者が弱い者を縛るためにある」というように定義しています。そうすると、すぐに関わりますね。

お釈迦さんが言われたのは、「不妄語戒」を道徳的に解釈してもらっては困るんです。そうすると、力の強い者は平気になってしまつて、「美しい嘘もある」などということにもなつてしまふわけです。そして、政治家の嘘も「これは美しい嘘だ」とか、勝手放題のことを言われてしまうことになるんですね。

そこで、この「不妄語戒」というのをよく読んでみると、お釈迦さんが言つておられることは、「あなた方はサンガ、佛教者の集まりにおいては、すなわち佛教者の仲間の間で、あなた方はいつも真実を語る勇氣を持ちなさい」ということになるわけですね。

真実というものは、人間を傷つけるんです。皆さんは真実というのはいいいものだと思つておられますが、それは間違いなんです。真実というものはとても怖いんですよ。いやなものです。真実を言われたら人間は傷つきますよ。

私は子どもに怒つたことがあるんです。「お父さんの音痴」と言うものですから、かんになつて怒つたら、「だって、本当だもの」と言うんです。しかし、本当だから怒るんですよね。歌がうまいのにそう言われてもだれも腹を立てません。だから、本当のことというのは怖いんです。相手を傷つけるんです。その辺が全然わかつていないのが日本人なんです。

シビアな問題で言えば、お父さんががんになったときに、「お父ちゃん、がんじゃないよ。ただのポリープなんだよ」と嘘をついても、人間関係がうまくいくかというと、こち

ら岸の問題としてはそういうケースもあるかもしれないけれども、佛さまの物差しで見たときに、どんなに辛くても、真実を語り合つて、真実の上に築いてゆこうというのが、お釈迦さまの「不妄語戒」の意味なんです。

それを簡単に道徳にしてしまうのは大間違いだと思うのです。だから今の日本の家庭で、果たしてこの「不妄語戒」、真実を語る勇氣がありますか。世間の物差しで家庭を作るというのは不幸です。いじめを受けている子どもが、そのことをお父さんにもお母さんにも言えない。そのために本当の親友にぼつりと告白するんですが、友だちは助けてくれないですよね。友だちが助ければ、その友だちが今度はいじめられます。ですから助けられるのは両親でしかない。家庭でしかないのに、ウーマンリブの人たちは「家族からの解放」と言つて、家族を壊そうとしているのですから、おかしいですよ。だから子どもは親に真実を言えないわけです。

ですから、そういう意味で、本当の人間の価値、人生の価値というものを私たちはしっかり持つていないといけないと思います。そうでないと、佛さまの家庭にならないわけです。

(つづく)

雲

心
象
書
道

永井健策

僕の気持ちがいづの間にか大きく大きく広がって、「雲」という字をこんな形にしてみました。

「雲」がもっと増えると「曇」となり、もっともっと増えると漢字の方が減って「雨」となる。

天気にして見れば中途半端な状況かも知れないけど、それだからこそ、いろんな意味を持っていると言えるのかも知れない、そう感じる文字ですね。

(ながいけんさく)

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

寺院紀行

浅草

誓教寺

撮影／タカオカ邦彦

文／真山剛



全十五冊揃っている「北斎漫画」

東京浅草のカツパ橋道具街といえば、調理器具のお店が並ぶことで全国的に有名な専門店街だ。プロ使用の道具が歩道に面してズラリ並んでいる。食べ物に興味があれば、素通りできない通りである。その通りに台東区立の図書館がある。そして、ガラス張りのきれいな建物の二階に郷土史コーナーがある。

今回訪れる誓教寺の歴史や、周辺情報をこの郷土史関連の書籍から調べようとこの図書館を訪れたのである。

さて、郷土史コーナーの宗教関係の棚の前に立って驚いた。ざっと見て、半分ほどが浅草寺関連の本なのだ。浅草寺（あさくさでら）と書いて「せんそうじ」と読む、雷門、仲見世、そして浅草観音で知られている東京で一番有名なお寺だ。

「浅草は全国的に有名な場所や物が多いのですが、中でも浅草寺は別格です。昔から台東区は寺院都市とか宗教区などと言われ、宗派を問わず寺院の多い町ですが、浅草のお寺の歴史はそれこそ浅草寺抜きでは語れません。そこに寛永寺、そして浅草本願寺（東京本願寺）まであるのですから、うちのような小さな町寺を調べるのは大変ですよ。」

歴史が好きで國學院大学の文学部史学科を目指したという誓教寺第二十一世、本多英之住職はその訳をこう説明してくれた。

確かに誓教寺に限らず、数多い町寺の資料はなかったが、それは

「北斎漫画」は当時のお手本になっていた



戦災や震災でほとんどの寺院が灰燼に帰したからで、逆にどんな寺院がどこにいつあったのか、といった資料はきちんと整理されている。ちなみに宗教区といわれる台東区には浅草仏教会、下谷仏教会合わせて三百四十の寺院がある。東京二十三区の中でずば抜けて多く、一番少ない目黒が二十九に比べると十倍以上だ。

今の目黒からは想像できないが、確かに江戸時代、目黒が郊外だったことは落語「目黒のサンマ」の通りで、かたや大川（現隅田川）沿いの浅草は江戸一の繁華街だっただけにお寺も多く、まさに宗教区の冠は伊達ではない。

しかし、なぜこんなに浅草はお寺が多いのか？ 本多住職に聞いてみた。

「もともと浅草寺を中心とした寺町だったところに、江戸幕府の思惑で各所から集められた訳で、集めた理由はそれこそ私も知りたいですね」

昭和初期に編集された区史にその様子がこうしるされている。少し長いが引用してみよう。

「前略——ここに注意を要する事は此等の浅草の寺院が出来たのは、この方面に信者が多数あったが為に建立せられたものでは決してない。日本橋 神田 湯島方面にあった寺院が数度 本区に移転したものであったのである。」

山門入り口に建てられた監教寺の案内立て札



慶長六年には本郷湯島より、同十年には神田台より、同十六年には芝崎より、夫々移転し来り、又寛永十六年五月中には、江戸城拡張と共に、八丁堀に市外邸宅地を開設する関係上、ここにあった寺院を浅草の八軒寺町、新堀端方面へ移転せしめ、正保年中には本所矢の倉などを建設する為、鳥越の地を切崩し、その土を埋め立てた関係上、鳥越の寺院の多く山谷方面へ移転したり、矢の倉や谷寺町、芝崎町、柳原方面等よりも、同年中浅草に移転して来た寺院は多かったのであった。又明暦の大火は江戸市外の一新規画を示した時であつて、火除地の必要に迫られ、市内の寺院は多く浅草方面へ移転されたのである。かかる訳で、浅草は言わば寺院の溜り場であつたのである。なぜ幕府はかかる方針を取つたか、是は推測を許さぬ所があるとしても、少くとも、浅草が従来寺町として成功し繁昌して来たし、また今後共寺院集籍地として適当なりといふ見解の元に、事丈は想像し得られようと思ふ。故に多くの寺院が浅草に集まり、その門前町も漸時起立して行く様になつて、浅草は、専ら多数の寺町の郡を為していた様なものであつたのである。

かかる関係上、浅草の寺院は他の地方に於ては見られない特殊な異彩を放っていたものである。——後略——

ということである。どうも江戸の開発にともなつて移転せざるを得ないお寺はとにかく浅草へ、ということのようである。しかしそ



境内に残る隠れキリシタンの灯籠

の後、今度はこの浅草から多くのお寺が移転することになる。時は大分下がって、昭和になってからのことだ。

今回訪れた瑞亀山経弘院誓教寺も例外ではない。誓教寺は浄土宗総本山知恩院の末寺として慶長十五年（一六一〇）日本橋矢の倉（現中央区東日本橋）に創建された。開山上人は善蓮社貞譽閑悦淨求大和尚で、正保元年に現在地に移転。ちなみに当時の地名は武州豊島郡浅草新寺町、または横寺町。その後誓教寺門前町などが開けるが、昭和三年の区画整理で移転を求められる。移転すれば境内地は広がり、移転しなければ境内地の一部を道路用地として提供しなければならぬという選択を迫られるが、移転を拒否、現在地に残ることを選んだ。

「祖父と父の決断でしたが、ここ浅草に比べれば移転先は随分田舎でしたし、何よりここは葛飾北斎緑の地。それが移転しなかった一番の理由だったのではないでしょうかね。」

浅草といえは下町の代名詞と言っても過言ではないが、この誓教寺周辺にはまだ職人さんがたくさんいる。刷師、彫師、版本師、竹の皮でバレンを作る人といった具合だ。そうした職人に縁の深い浮世絵師、葛飾北斎の菩提寺がこの誓教寺だ。

入り口脇には区の家内掲示板があり、客殿脇から入る墓地の中央に北斎の墓がある。南腕院奇誉北齋居士が法号、これが北斎の戒名



北斎が亡くなった通照院

江戸東京博物館近く立つ北斎誕生の碑



で、誓教寺第十五世超傳和尚が授けている。腕の字は窓だが、煙突の意で、南は北と対句になっている。浄土宗ならではの番号には奇の字が使われている。

「いや、この奇の字は変奇人の意味ではないでしょうか。かなり個性の強い絵描きさんだったようです。絵を見ると襟ひだが細かく描かれていたり、自分らしさをとでも意識していた人のようです。八十歳を過ぎてから、長野の小布施まで三度も行っています。もちろん歩いてですし、碓氷峠を越えたのですから、驚くばかりです。また、具合が悪くなると薬を自分で調合し、治していたといえますから、やはり変わった人だったのでしょう。」

江戸時代の浮世絵師として有名な葛飾北斎の墓はその子孫が明治の初めに建立したもののだが、墓石の正面には画狂老人正墓と刻してある。そして右側には「飛登魂てゆく気散しや夏原」（ひとだま で ゆくきさんじや なつのはら）という辞世の句が記してある。

現在は子孫が途絶え、代々の住職が命日の四月十八日を北斎忌として慰霊法要をつとめているが、学者や研究者、浮世絵職人、画家、画商、出版関係の人たちが参詣し、誓教寺に残る北斎の浮世絵を楽しんでいる。

現在誓教寺には数枚の北斎の画が残っているが、中でもカラーグラビアで紹介した「骸骨の図」は逸品だ。北斎が九十歳の時の作品



鳥越の名物、おかず横丁

だが、この一枚を書くために北斎はわざわざ奈倉医院に骨格の勉強をしに行ったという。北斎は生涯に五万枚とも六万枚ともいわれる作品を残しているが、中でもこの絵の秀逸の一枚だという。

さて、この北斎、宝暦十年（一七六〇）に下総国葛飾、本所南割り下水の地（現在の亀沢一丁目）に生まれた。鏡師の養子に入るが家業が合わず若隠居。十九歳で役者の似顔絵で有名な絵師に弟子入り、絵師として第一步を踏み出す。が、破門、自分で日本の各派から中国、西洋の絵画までどん欲に学び、北斎ならではの画風を確立した。有名な「富岳三十六景」「北斎漫画」をはじめ、その作品の膨大さは前述したが、日本はもとより外国にも影響を与えている。特にフランスの印象派の画家たちを感銘させたという。

しかし、実際の北斎はかなり変わっていらしく、宗理、可候、画狂人、卅など三十を超える画号をもち、嘉永二年（一八四九）九十歳で亡くなるまでに九十三回の引越しをしている。また、死に臨み「吾に十年余の寿命があれば、いや、五年でもよいから生きれたら本物の画工になれるのに」と嘆息したほどで、まさに絵への執念あふれる天才だったようだ。

本多住職はそんな北斎をこう評する。

「とにかくアクの強い人だったみたいですね。そして、祖母が墓地改装の時にお骨を確認しているのですが、骨太で背の高い人だった



孝徳天皇の頃、六百五十一年の創建された熊越神社



境内にある北斎生誕二百年記念碑。北斎が好んで使用した富士の落款をモチーフにした

ようです。また、北斗信仰を持っていたから北という字を使っていたようですし、とにかく強烈な個性の持ち主だったと思います。

ですから、北斎みたいな人が家族にいたら大変で、親戚程度の距離感がいいのではないのでしょうか（笑い）

北斎は菩提寺に先祖のお参りに来ては布施代わりにスケッチを置いていったという。残念ながらそのスケッチは大震災と空襲で焼失してしまっている。しかし、先代が苦勞して集めた「北斎漫画」をはじめ、残っている作品はまさに哲教寺の大切な寺宝になっている。

北斎は生涯に九十三回引越したというが、本多住職の引越しは一回である。本多住職は戦後の昭和二十一年に東京三田にある浄土宗寺院、願海寺の住職、森部英雄師の次男として生まれた。高校から國學院に通い、大学在学中に僧籍をとり、会社勤めを経験する。そしてこの哲教寺の先代本多祐吾住職の長女、友子さんと結婚。

「昔から歴史が好きで、大學も史学に行きたかったのですが、父の反対で法学部へ入りました。それでも結局、法制史を学んだんですけれどね。」

そういう住職にとって、この北斎の墓をまもるお寺は、まさに大好きな歴史と縁を結んでくれるかけがえのない場所である。優しさが自然と滲み出る人柄は、浅草という所で歴史に囲まれながら、より生き生きしたのである。

（ルポライター）



哲教寺墓苑全景

【訂正とお詫び】
本誌7、8月合併号「寺院紀行」の15ページ二行目、五行目の「晴子さん」は「春子さん」の間違い、19頁写真下の説明文中の「矢吹照夫浄土宗顧問弁護士」は「矢吹輝夫浄土宗顧問弁護士」の間違いでした。ここに訂正しお詫び致します。

連載

会いたい人
関 容子

富士真奈美
さん ②



撮影／タカオカ邦彦

眞奈美さんが女優になるキッカケとなったのは、民芸が『アンネの日記』の主役を一般から公募したことによる。

「十代のころは、信じられないくらいやせて細かったの。当時『アンネ』を読んで感動して、あのアンネの役だけなら私はできる、と思った。でも女優になろうなんていう大それた考えはまったくなかったのよ。女優というのは原節子さんとか高峰三枝子さんとかの本格美女がなるもので、別世界の人、という気がしていたから。すぐ上の姉が朝日新聞の公募記事を指して、これなら眞奈ちゃん、いいかもよ、って。ちょうど夏休みだったので、じゃあ受けてみるだけ、と思ったの」

応募者数は二万人とも言われ、そこからまず三十六人にしぼられ、次の六人の中にも入った。

「その六人には信濃町の野球会館で、滝沢修先生が何日間か、特別レッスンをしてくださいだったの。先生は上半身裸、頭に手拭をキュッ

と巻いて、バレエとか台詞の講習をしてくださるんだけど、六人の中でもひととき目立ったのが三井美奈さん。浅黒く整った顔立ちで、まるでスペイン人の美少女みたいだった」

レッスンは終わると、眞奈美さんは横浜の従兄夫婦の家に帰るのだが、その美少女と一緒に横須賀線がだんだん増えて行った。

「横須賀線に二人並んで座っていたら、外人が話しかけてきたの。どこその駅は？ って。三井さんが落ち着き払ってツー・ステーションズ・モア、って応えたのよ。すごいなあ、きれいな上に何でもできて……。丹那トンネルを越えて出てきた私が、都会の少女に目を見張って、いわばライバルにファンレター書いてちゃったの。あなたは素晴らしいって。人がいいわねえ（笑）」

結局、アンネ役には三井美奈さんが選ばれ、当時の新聞で大きく取り上げられた。日本初演の『アンネの日記』初日。眞奈美さんは俳優座劇場に招待される。

「演出家の岡倉士朗先生と客席で並んで観たの。観終わって、劇場の前の今はもうないけど銀星という喫茶店で先生とお茶を飲んで、やっぱり三井さんでよかった、って感想言っただと思う。つまり伊豆の血、ってそうなのよ。諦めが早くて、人を押しのけても、というのがないの。だからお相撲さんとか政治家には向かないわね。隣り町出身の石橋湛山さんなんか、首相になって二か月で潔く辞めちゃったでしょ。私も女優向きじゃないの」

真奈美さんは十八歳の春から藤沢市で暮したことがある。父親の友人で子供のいない夫婦の家にしばらく同居したのだった。

「とにかく六人兄弟の過当競争から脱出できるのが嬉しかったのよ。そこで豆記者みたいなことをして、おじさんと一緒に市役所まわりとかして原稿に赤入れしてもらったり、おばさんもお料理教えてくれたりして、私は一人娘分で結構幸せだった。お風呂がなくて、

バスに乗って銭湯に行くんだけど、帰りにお店屋さんでブラウス買ってもらったり、とても可愛がってもらった。でもその年の秋にNHKから一通のハガキが届いたの」

この度、内村直也氏がNHKに連続テレビドラマを書くに当り、ヒロインとして民芸から推せんがあつたのでオーディションを受けに上京していただきたい、という内容だった。「アンネに応募してから一年ちよつとしか経ってないのに、もう遠い昔のことのように思ってたからびっくりしたわよ。でも内幸町のNHKへ行つてカメラテストを受けたの。次に内村先生から質問されて、君は普段御両親のことを何て呼ぶの？ はい、父さん母さんです、とかね。本当は『えり子と共に』のテレビ版みたいなものだから、お母さまあ、そうじゃなくってよ、なんていうほうがよかったんでしょけど。君、オペラが好き、って書類に書いてあるけど何か歌えるの？ って訊かれて、そこにあつたグランドピアノに寄

18歳、NHKにて



池波先生に「最適役」とほめられた
「鬼平犯科帳」おまき役



りかかって、『蝶々夫人』のアリア（ある晴れた日に）を原語で朗々と歌い出したら、あ、もういいよ、って（笑）」

しかし真奈美さんは合格する。NHK側はまったく女優経験のない子に連続ドラマの主役を任せるのを相当躊躇したらしい。

「内村先生が私に当てて書くから、と強く推してくださったらしいの。『この瞳』というテレビドラマで、ヒロインの名が友田まなみ。私は本名岩崎真奈美んだけど富士という芸名は出身地からNHKの人が考えてくれた。デビューしてすぐに、NHK専属女優第一号で契約したの。給料が一万五千元」

このドラマには滝沢修、下条正己、宮崎恭子、幸田弘子、大山のぶ代などが出ていたが、下宿代の儉約のため、大山のぶ代とは三年間ルームメートになった。

「部屋代八千円は大変だったからね。大山さんは、そのころ俳優座付属養成所の六期生で、私も暇なときはくつついて行つて授業を後ろ

のほうで見てたら、すごく楽しそうなのよ。音楽の時間なんか一緒に大きな声で歌っちゃって、君は生徒じゃないんだから、って言われたりね。でも私の伊豆訛りをなおすのにちよいどいいと思ったから、翌年試験を受けて九期生に入つたの。月謝の三千元はNHKが出してくれたわ」

そして真奈美さんに幸運が訪れる。つい先日、真奈美さんから私に小磯良平描くところの美少女の絵ハガキが届いたが、よくよく見ると、十代の真奈美さんの肖像だった。

「ね、すごいでしょ。私なのよ、これ（笑）。この間、大丸で小磯良平展があつて、この絵ハガキが出てるって聞いて、慌てて行つて百枚買つてきたの。私が新人のころ、週刊朝日で女優の肖像画の表紙コンクールがあつたのよ。錚々たる画家が大物の女優さんを競作して出したんだけど、小磯画伯はモデルに私を指名してくださって、それが何たることか、読者の投票で第一位になつちやつたの」

やがて松竹映画からも出演の声がかかる。

まずは高田浩吉主演の『清水の佐太郎』。

「木暮実千代さんが次郎長の奥さんお蝶の役で、とってもきれいだった。嵯峨三智子さんもきれいで、白桃のようだったわよ。私よりいくらか上じゃないのに、豊満で色っぽくていかにも大人の女の人って感じ。私なんか小女こめよ（笑）。ゴシップもすごくて、二枚目俳優総なめ、という感じ。男の人を呼ぶと、青白くメークして、ライティングして、ベッドに横たわってた、とかね。よき時代の女優さんだわね。そんなエピソードを残してる、って素敵じゃない」

ここで真奈美さん自身の花やかなゴシップについてもふれたい。噂の主は当代きつてのプレイボーイ新進気鋭のジャズピアニストとか、一世を風靡したテレビ時代劇の原作者である花形作家とか……。

「二十二、三の頃にミュージカルに出たこと

があつて、その作曲家兼ピアニストと三年ほど。次に奥さんのあるさる作家と恋愛して三年間。三年、三年なのよ、私。それからワンポイントリリーフが一人あつて、三十六歳で結婚して十年で離婚。結婚は恋愛じゃないから、三十代からまったく恋とは縁がないの」

さる作家との出会いは、四谷のホワイトホースというバーだった。近ごろでこそ真奈美さんはお酒をあまり飲まないが、酒豪のころの真奈美さんをそのバーで一度見かけたことがあつた。

「その音楽家とは夜な夜なあちこちのバーで飲み明かしてたわね。そんなころにさる作家に出会って、最初会ったとき税金の話ばかりしててやだなと思つたんだけど、よく見るとハンサムだった（笑）。私、面喰いだから。私って不思議なことに、ちよつと仲のいいボーイフレンドができるとみんな三島まで連れて行って、親や兄弟に見せてるの。もっとも父は結核で五十二歳のときに亡くなってるか

ら、父がいたらそんなこともしなかったと思うけど、噂は週刊誌沙汰にもなってたし、母親も知ってたのよ。さる音楽家もさる作家も、みんな連れてったの（笑）。私がコソコソしないから、恋愛してるように見えなかったんじゃないかしら。御馳走したりして、みんな歓迎してくれたわよ」

つい先日、真奈美さんは久し振りに三島へ帰り、鰻屋に飾られた色紙の額を見てびっくりした。

「相合傘にさる作家と私のサインが並んでるじゃない（笑）。平気なもんね。私、鰻は嫌いなのに、彼のために我慢して親子丼でも食べたのかな。サイン求められて、断わらなか



娘とともに。（専業主婦時代）

ったのね。こんなのも人から見たら失点のようだけど、そのとき楽しかったことのモニュメントだったんだから、まあいいか、と思うのね」

そのころ眞奈美さんの美貌は資生堂の注目するところとなり、専属としてPR誌の「花椿」やテレビの提供番組で活躍するようになる。

「土曜のお昼のナマ番組で、滝田裕介さんと私が司会。『東は東』というバラエティー・ショーなんだけど、番組が始まると山下清さんがスタジオのガラスに花火とかひまわりの絵を描き始めて、終わるころに完成するの。毎週それ消しちゃってたんだからもったいない話よね。ハワイロケしたり、番組にダニー・ケイを招いたり、すごく楽しかった」

そして資生堂が総てお膳立てをして、NHK時代からの仲良し小林千登勢と二人で二か月間もヨーロッパへ派遣してくれた。

「パリでは雑誌マリ・クレールの編集長と

か、ロンドンではコヴェント・ガーデンで『眠れる森の美女』を踊ったプリマとかにインタビューして『花椿』に原稿を送るの。フランクフルト市長邸やギリシャ大使にも招かれたり、今ならこんな天国みたいな生活、ずっと終らなければいいと思うのに、当時の二人は若かったのね、夜になると手紙ばかり書いて、早く帰りがつてたの。千登勢はのちに結婚する山本耕一さんに、私は恋愛が始まったばかりの、さる作家によ（笑）」

（つづく）

伝統医療の代表

「中国伝統医療」

代替医療と呼ばれる療法の大きな柱をなすものが「伝統医療」だ、ということは前に一度書きました。伝統医療ですから、近代西洋医学が成立するたかだか二百年前よりはるか以前から人を癒してきた医療なのですが、近代西洋医学の間尺では測れないことから無視され、ゆえに「代替医療」という枠組みをつくり、支持した人たちからは大いに注目された、近代医学とはまったく別の医学医療体系を持つ偉大な療法です。そのひとつが、前に何度かふれましたが、わたしたちにもなじみの深い中国伝統医療です。

その体系は以下の四つに大別できます。

- 一、薬物療法Ⅱ薬膳と漢方薬
- 二、物理療法Ⅱ鍼灸
- 三、手技療法Ⅱ膏摩

CAMU Net / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

四、運動・エネルギー療法Ⅱ氣功

「薬膳」とはつまり「医食同源」ということですが、これは何も病気になるたつた特別なレストランに行つて作つてもらふということではなく、そうした知識が誰にもあり、日常的にやっていることです。昨今の若い人はどうか知りませんが、以前、歌手のアグネス・チャンがテレビで滔々と、この食材は陰だの陽だのと語っているのを見て驚いたことがあります。漢方薬は日本の言い方で、基本的に煎じて服用することから、中国では「湯液」と言います。

鍼灸はハリとお灸。膏摩とは手掌でからだを押ししたり揉んだり擦ったりすることです。ちなみに按摩の「按」は押すこと、「摩」は擦ることを意味しています。また氣功は、文字通りで言えば生命エネルギーである「氣」

の「功」＝錬磨すること、ということができます。

これら中国伝統医療の特徴は、といえば、これは一にも二にも「氣」という概念が基本にあることでしょう。生命体が生命体として生きている——このことは近代医学を持ってもいまだわかりませんが、そのエネルギーを「氣」と命名したのが古代中国でした。その氣が全身をめぐる道が「経絡」「絡脈」というルートで、両者を合わせて「経絡」と称しますが、氣が滞ることなく、スムーズにバランスよく全体を循環していればいい。しかし、どこかで停滞したりすれば、その経絡が関係する臓器や器官に影響が出る。それが病氣だ、という考え方です。

したがって、中国伝統医療の基本的方法は、その氣のバランスを取ることであって、だから中国伝統医療の診断書には病名はないとも言われます。

では、その異常はどこに現われるのか。それは「経穴」と呼ばれる部位、日本で言うところの「ツボ」で、これは経絡上にあって、その部位に対して治療を行い、氣の通りをスムーズにさせるのが鍼灸や膏摩だといえます。

一方、薬膳と同じように普段から自分の氣の調整を図り、常に氣が充溢し、スムーズに流れるような身体にしておく方法が氣功ですが、これは一九五〇年代末に劉貴

珍という人がつくった造語です。氣を練る健身術は中国全土に三千以上もあるといわれますが、「何だ、どれも共通するのは氣ではないか」ということで「氣功」ということばでくりました。

氣功には健康法から武術的なものまでさまざまありますが、基本は氣のバランスを取ること、氣のパワーの増幅だといつていいでしょう。ちなみに、氣功には自分でやる内功と、氣功師と呼ばれる専門家から氣を送ってもらう方法がありますが、基本は内功で、自分に氣功的受容装置がないと、他者からの氣は受け容れにくいといわれています。

以前、上海を訪れたときに、上海中医学院（中国医学の大学）を訪れたときだったか、言われたことがあります。

「中国人は普段は食や氣功で健康を守る。それでダメなら湯液や鍼灸にかかる。それで手に負えなければ西洋医学で手術したりする。それでも治らないがんなどは氣功治療院に入って、自分でも氣功を一所懸命やり、一方で氣功師の治療を受けながら頑張る」のだと。

その話を聞いて、統合医療とはこういうものではないか、と思いました。

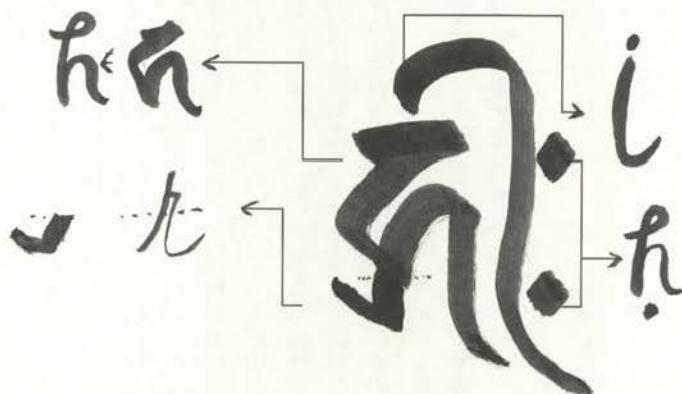
挿絵（1）毛筆書き



挿絵（2）刷毛書き



挿絵（3）キリク分解、英字と関連



連載「梵字」

③

梵字で表わす

阿弥陀仏

真野龍海

日本で御塔婆などで見られる梵字は、梵語がインドから中国に伝えられ、毛筆で書かれるようになりました。また、刷毛筆でも書かれ刷毛書きの独特の書体も使われています。どちらでも書かれますが、筆書きのほうが重厚で、刷毛書きの方がスマートにも思えます。

書き方も筆順、筆法等があり、特に真言宗の仏教では、重要視されています。

梵字で仏像や、世界の要素などを象徴的に表わすようになりました。こういう使われ方をする時、その文字は種字と言

われまず。

種から草木が発展するように、一文字の中にも、宇宙に向かって無限に拡がる仏様等を含む文字だから種のような文字と言われたのでしょう。

梵語はヨーロッパの言語と同じ流れです。梵字も例えば、英語と比べると同じ点が多く分かります。ちょうど、野球球団のジャイアンツ (Giants) を G で、タイガース (Tigers) を T で、それぞれ頭文字で表わすように、梵字も、仏様の頭文字等で示されています。大日如来 (Vairocana) は V で表わされます。

さて、この英語の場合は、言葉通り、頭文字をとって表わしますが、梵字の場合は、この大日如来のように頭文字の場合もあります。昔からのきまりとか伝統で、仏さまの原語と直接関係のない文字のものもあります。しかし、伝統の中で、それぞれに決められています。これを、私どもがもっとも見る機会の

多い仏様から、見ていきましょう。まず、阿弥陀仏です。

阿弥陀仏は梵字の「h」、「r」、「i」のキリク四文字、普通短くキリクと言っている四文字で、挿絵(一)(毛筆書き)のように表わされます。このローマ字から読むとフリーヒ (hrihi) ですが、梵字では、ハ(h)行はカ(k)行で発音されていますから、フリーヒ (hrihi) はキリク (kriku) と短く読んでいます。

このキリクの中でクと表示している最後の文字「h」はヴィサルガの「h」で、直前に来る母音、この場合「i」を短く発音、「イキ(イ)」「ih(i)」と発音することになっています。それが、さらに梵字では転じて「イク」と読み慣わすようになりました。四文字でキリクと読んでいます。

ちよつとややこしくなりましたが、図のように阿弥陀仏様を梵字キリクで書き表わします。キリクという言葉の意味は

ありません。

この挿絵(一)(毛筆書き)のキリク四文字は挿絵(三)のように分解しますと、英語、ドイツ語等に似ていることが分かります。なお、梵字では、二文字を組み合わせた場合、上下であると、下に繋ぐ方の文字は、上の文字の下に、下半分を切って繋ぎます。これを切り接ぎと言います。キリクの場合キとリが切り接ぎになっていて、キの次のリが、上半分を切り捨て、力の字に付けています。

挿絵(二)は刷毛書きのキリクです。このように、阿弥陀仏様の尊像がなくとも、梵字で、さらに入魂の儀を執り行えば、全く尊像と同じように礼拝できます。先般、バリで法要を行ったときも、キリクを色紙に書いた物を持参しました。また、即座に、キリクを書いてもいいわけです。声に応じて即阿弥陀仏が現れたまう、と説かれますが、キリクに応じて阿弥陀仏を拜むことができます。

この世のいのりに、仏にもかみにも申さん事は、そもくるしみ候まじ、後世の往生、念仏のほかにあらぬ行をするこそ、念仏をさまたぐれば、あしき事にて候え。この世のためにする事は、往生のためにては候わねば、仏神のいのり、さらにくるしかるまじく候なり。

【津戸三郎へつかはす御返事】

この世をよりよく過ごせるように仏さまや神さまに祈ることは、差し支えありません。けれども後生の往生を目指して、お念仏以外の行を修めることは、お念仏を妨げますから、よろしいことはありません。この世でのご利益のために祈ることは往生のためではありませんので、仏さまや神さまに祈りを捧げても格別不都合なことではありません。

いいかげん？

しばらく前になるが、東京のあるご住職から「とある地方に行ったら、仏壇と神棚の両方が祀ってあった。なんとも不思議だね。ウチのお檀家にはそういう家はないなあ」といった話が出た。要は、「神」と「仏」とがなんの矛盾もなく(?)祀られているのが奇異だというのだ。

なるほど、もつともなことかもしれない。しかし反対に、地方に生まれ育った筆者には、高校を卒業して都会に出てきたばかりの頃、その逆の状況、つまり神棚を祀っている家がほとんどない(見た範囲では)のを知って驚き、奇異に感じたことが思い出される。後、実際は東京にも神棚と仏壇の双方を祀っている家は少なからずあることを知った。もちろん、地方にも仏壇のみを祀る家はたくさんあるだろう。

筆者の生まれ育った地を例にさしていただくなら、以前は田んぼの広がる、もともと農業中心の地域であった。そのせいか、神事は比較的重視されていたようだったし、別に農業とは全く関係のない家でも、仏壇のみならず神棚を祀っていた家は多くあった。もつとも、あれから三十年たった今はずいぶん様子

が変わっているかもしれない。

そうした実体験をもとに、宗教学、民俗学的領域に踏み込む危惧を恐れずに言えば、おそらくいつの頃にか、現実の生活の営みに関することは「神」、先祖のことは「仏」といった、いわば守備範囲のようなものが想定され、それが暗黙的に相承されてきていたのではなからうか、と思える。きわめて不遜なことであるが、巧みに「使い分け」がなされていることになる。「神仏に祈る」、「神も仏もない」といった表現は今でもよく使われているが、「神」と「仏」が同時に扱われていることに、特段の注意が払われることがないのもそれと関連があるのかもしれない。

別に「双方を祀るのがいい」と推奨するわけではない。が、そうした事実があるということ、そしてそれは昨日今日に始まったことではないということだけは認めなければならないだろう。少なくとも、たとえ形態は違って、法然上人の時代にも「神」と「仏」との双方に手を合わせる、いわば並列性があったであろうことが、ご法語にうかがうことができる。そしてそのことに対して、

とくに矛盾が感じられているようでもない。

一宗派の開祖であつてみれば、その開祖自身の人格や性格といったことももちろん関係するだろうが、自宗のよさ、正当性をアピールするためには、他教・他派に対し排他的であつても致し方ない。だが法然上人の場合、そうではなかった。「凡夫」の立場から人々の実生活を間近に見ていた上人は、「祈る」という極めて複雑な、多重構造の心作用を的確につかんでいたのではなかっただろう。その上人ならではの、と言えるであろう冒頭のご法語である。

日本人の信仰形態を「いいかげん」と指摘する向きは強い。諸宗教の信者総数が日本の人口を上回るという調査結果などが、その材料となっているようだ。しかし、それは往々にして、いわゆる一神教という物差しで測った結果の指摘である。一神教が「秀」、多神教が「劣」と定義づけ、後者をいいかげんと断ずるのがはたして正しいかどうか。中東で繰り広げられている、宗教を淵源とした血みどろの戦いをメディアで見聞きするにつけ、そうした指摘への疑問と法然上人の懐の広さをあらためて感じるのである。

(小村 正孝)

民話

をたずねて

連載

命のロウソク

石崎敬子



ΦISHI
IKI KAWA

絵 石川忠夫

昔々、たいそう働き者の、仲の良い兄弟がおったと。

ところが、ある日、あにさんは起きるなり、

「なんとも気分が悪い」

と言うて、そのまま寝込んでしもうたと。

それからというものの、日を増す毎に様子が悪うなつて、弟がいろいろと手を尽くしたが、少しもようならんかったと。

弟は、

「神様、あにさんを助けて下さい。あにさんのためなら、何でもします。お願いでございます」

と、あにさんの枕元で、祈るばかりであつたと。

そのうち疲れ果てた弟は、神さまに手を合わせながら、うとうとと眠りこけてしもうた。

すると、どこからか不思議な声が聞こえてきたと。

「お前の願いを叶えてやろう。今から天に登る梯子をつかわす。その梯子を登つて、兄の命を見つけるのじゃ。よいな」

弟は、はつとして目を覚ましたと。

「いったい今の声はだれじゃろか。天に登って、あにさんの命を見つければ、どういふことじゃろか」

夢に違いない、いや空耳じゃろ、そうは思ったものの、弟は外へ出て、天を見上げた。

すると、空からなにやら降りてくる。それは、長い長い梯子じゃった。

「おお、梯子じゃ、梯子じゃ。あの夢はほんとうじゃった」

弟はさっそく梯子につかまり、ずんずん登って行つた。さあこれで登り切つたと思つた瞬間、がらんとした大きな部屋の中に立つておつた。

薄明かりがさしておる部屋の中を、用心深く眺めておつた弟は、息が止まるほど仰天した。部屋の奥には扉があつて、その扉の前に、なんとでつかい赤鬼が座っておるではないか。

「あの向こうにあにさんの命があるに違いない」

あにさんを助きたい一心で、扉の方に行こうとしたが、ガタガタと膝が震えて、いつこうに進まん。赤鬼に気づかれぬようにと息を

ひそめておると、ガーガーといびきが聞こえてきた。

「赤鬼め、さては眠っておるな」

弟は、赤鬼の脇をすり抜け、そつと扉を開けた。すると、そこもまた大きな部屋であつた。しかも、その部屋の奥にも扉があり、今度は青鬼がどでんと立っておる。

その青鬼の目はまばたきもせず、弟をきつと睨んでおる。もはやこれまでかと、弟はその場に立ちすくんだ。ところが、いつまでたつても青鬼はこちらに來ん。

弟はそろりそろりと近づいてみた。目は弟の方を見据えたままだが、ぴくりともせん。よく見ると、青鬼は目を開けたままで眠っておつた。

ありがたい、助かつたと、弟は、青鬼の脇をすり抜けて、また扉を開けた。すると、そこには明かりのともつた口ウソクが、限りなく立ち並んでおつた。ちらちらと揺れる一本一本の明かりが、見渡すと大きな光の波となつて揺れておつた。なんとも不思議な眺めに弟は声も出なかつた。



ΦISHI
KIKAWA

その時、目の前の短い口ウソクの明かりが、大きく揺れ、ふっと消えてしもうた。すーっと小さな煙が立ち上がるその口ウソクの根本には、名札がついておる。

「そうか、これは人の命の口ウソクじゃ。口ウソクが消えると命が終るということか」

ハツとした弟は、いま消えた口ウソクの名札を、慌てて確かめた。

「良かった、良かった。あにさんの口ウソクじゃない。あにさんの名札はどれじゃ」

弟は、次から次へと名札を見ていった。これでもない、あれでもない、と急ぐあまり、転びそうになり、口ウソクの明かりが、何本か揺らいだと。

「おっとっと、危ない、危ない。うっかり人様の明かりを消したら、たいへんなことじゃ」

弟は、はあーと大きく息を吸い込んだ。ふと見やると、倒れておる口ウソクがあり、今にも消えそうであつたと。名札にはあにさんの名前が書いてある。

「あつた、あつた、見つけたぞ」

弟は、まだまだ長いあにさんの口ウソクをそつと立て直した。消えかかっておつた炎が、すいと燃え上がったと。

すぐ隣の口ウソクには、弟の名札があつたと。弟は、あにさんと自分の口ウソクの根本を、ろうでしっかり固めたと。

「よし、これで大丈夫」

二本の口ウソクは、いっそう赤々と燃え上がったと。

弟は、まだ居眠りしておる青鬼、赤鬼の脇をそろりと通り抜けて、最初の部屋に戻った。ところが、梯子が見つからん。部屋の中をうろろしておると、いつの間にか我が家の前に立つておつたと。

「あにさん、あにさん」

弟が家の中に駆け込むと、あにさんが、

「ああ、どうやら寝すぎたもた。腹へつてたまらん」
と布団から起き出してきたと。

それから、あにさんも弟も、長生きしたんだと。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

〔特選〕

●棒
警棒の痛そうな色夏の果て

永野 司郎

警棒の色と言われてはてと首をかしげる。

色のことなどまるで覚えがないのである。それでも痛そうと言われてみると、そのようにも見えてくる。普段のそういうものに対する拒否反応に違いあるまい。

〔佳作〕

菜種蒔き土にしるべの棒を挿す

金谷 友江

麵棒の母の手跡や盆三日

中島富士子

立ててある棒に蜻蛉の眼が動く

石原 新

●音楽

〔特選〕

音楽と体育がだめ百日紅

水越 藍子

自分がそうだったのか子供のことなのか、それらは読者に任されている。ただ音楽がだめで体育もというと、そのほかの科目から見

えてくるのは、勉強のよくできる、優等生型の生徒だろう。

〈佳作〉

音楽会の余韻に歩む夜の秋

片桐てい女

音楽に踊るベツトや柿若葉

谷 しげ子

涼しげに音楽聞こえ埴輪展

井村 善也

●自由題

〈特選〉

とかげの子すでに威嚇の舌ちろと

北川 弘子

舌をちろちろ出すのは、威嚇でも何でもないのだが、作者はあえてこう言う。小さいのが石の上かどこかで、空を仰ぐような格好でこれをやっているのだろう。いっちようまえにということである。

〈佳作〉

青田風道まっすぐに干拓地

佐藤 雅子

夏草や声甲高き測量士

浜口 佳春

箒目の上にのりたる柿の花

小林 恵美



浄土詩上句会の お知らせ

③季語ではありません

息

看板

自由題

参加作品

編集部選

棒

鉄棒や懸垂の背に大夕焼け	浜口 佳春
棒鰭を好みし舅の忌を修す	佐藤 雅子
身を反らす棒高跳びや雲の峰	井村 善也
棒の飛びいたちと解けし一瞬に	山本美代子
棒に振ることなき日々よ秋深む	大場 清
辛抱と言ふ棒担う戦前派	中島 一子
月かげや胸の戸に掛く心張の棒	片桐てい女
夏海や扇の戸口檉の棒	清水 みね

音楽

露涼し音楽堂より鱈の曲	河合富美枝
緑濃き木々の芽吹きや音楽堂	増田 信子
風薫る音楽法要肅々と	佐藤 雅子
爽籟や音楽となり瀬にまじる	大場 清
尺八も入る音楽会や夏館	金谷 友江
雨音に音楽重ね梅雨の空	今井 恵子
自由題	
産土神の道へ一筋麦の秋	河合富美枝
風の海見えて目深に夏帽子	池田 伊吹
夏浅し土匂わせて野菜売り	山口 信子
夕涼み椅子を並べて浜の町	加藤 政男
風待ちの船のひしめく初夏の湾	西井 正
近江路は卵の花腐し汽車の中	谷 しげ子
水無月や神花咲くひめやかに	中島 一子
萌えもみじ摘んでたべたやわらか見	生田 正昭
御仏に守られ名医と出会ふ夏	清水 みね
梅雨空に濡れて色濃き花一輪	今井 恵子

締切・九月二十日

発表・『浄土』二〇〇三年十月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんね

3 かい目

かまちのふろし



編集後記

天気まで不安ばかりの初秋かな 岱潤

最近世の中で多く耳にする言葉に「不安」があります。作家の五木寛之氏は五月に『不安の力』という本を出され、今も本屋に山積みになっていきます。また新聞やテレビでは連日のように、「将来への不安」という言葉が繰り返されています。経済面で使われることが多いようですが、年金制度や健康保険制度の存続の問題、銀行の不良債権問題、不況やデフレやリストラ等々、つまり老後の生活への不安が現実化して、じっとしてられない時代になっているからです。

そして北朝鮮とアメリカの問題も、この先の日本の存亡まで関わる問題として、若い人の間にも不安が立ち込めています。

ます。またこの国の食品、環境に関する問題も、一人一人の健康、いのちの問題として不安を駆り立てます。五木氏は、「不安を感じるからこそ、とりあえず今日一日を、できるだけしっかり生きようと思う」とおっしゃり、「不安は力なり」とまで言い切っています。つまり「頭から不安を追い払おうなどと考えず、不安を生きる力とする道をさがしてみたい」と逆説的に提案しています。

不安、絶望、病氣、失敗……こうした人生のマイナスイメージと思われることも、許容してゆく姿勢こそが、人に対する優しさにつながるのだと思います。(長)

雑誌『浄土』を支えて下さっている方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・円光寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村真道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集顧問

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
村田洋一

大宰了皓

浄土

六十九巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年八月二十日
発行 平成十五年九月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーデイイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(五七八)六九四七

FAX 〇三(五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

昭和二十年二月号



表紙・巻頭カット	牧野醇	巻頭
ただ戦心のみ		
徳本行者	吉田絃二郎	3
工場の威激	伊藤久子	6
お婆さんの心意気	小坂信教	9
柚の醍醐味	斉藤弔花	13
車中の総親和	安井大學	5
仏教音楽について	石井文雄	7
信仰相談	中村辨康	12
歌壇	岩野喜久代選	11
俳壇	太田耳動子選	16
浄土宗の鍊成思想	大野法道	14
編輯後記		16

昭和二十年三月号



表紙・巻頭カット	中島保	巻頭
國民精神の闘ひ		
浅春合掌	吉田絃二郎	3
書生謳歌の頃	大村桂巖	8
信仰相談	中村辨康	11
他力信心の建設力	下村湖人	6
滅私奉行に徹す		12
浄土宗の鍊成思想	大野法道	14
編輯後記		16

法然上人鑽仰会の



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



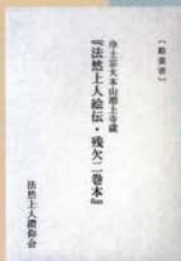
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法話抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036